

群 教 セ	G02 - 03
	平27.257集
	社会 - 中

複数の歴史的事象を総合して、時代の特色を 考察し、表現できる力を高める指導の工夫 ——小中のつながりを意識した学習活動の設定を通して——

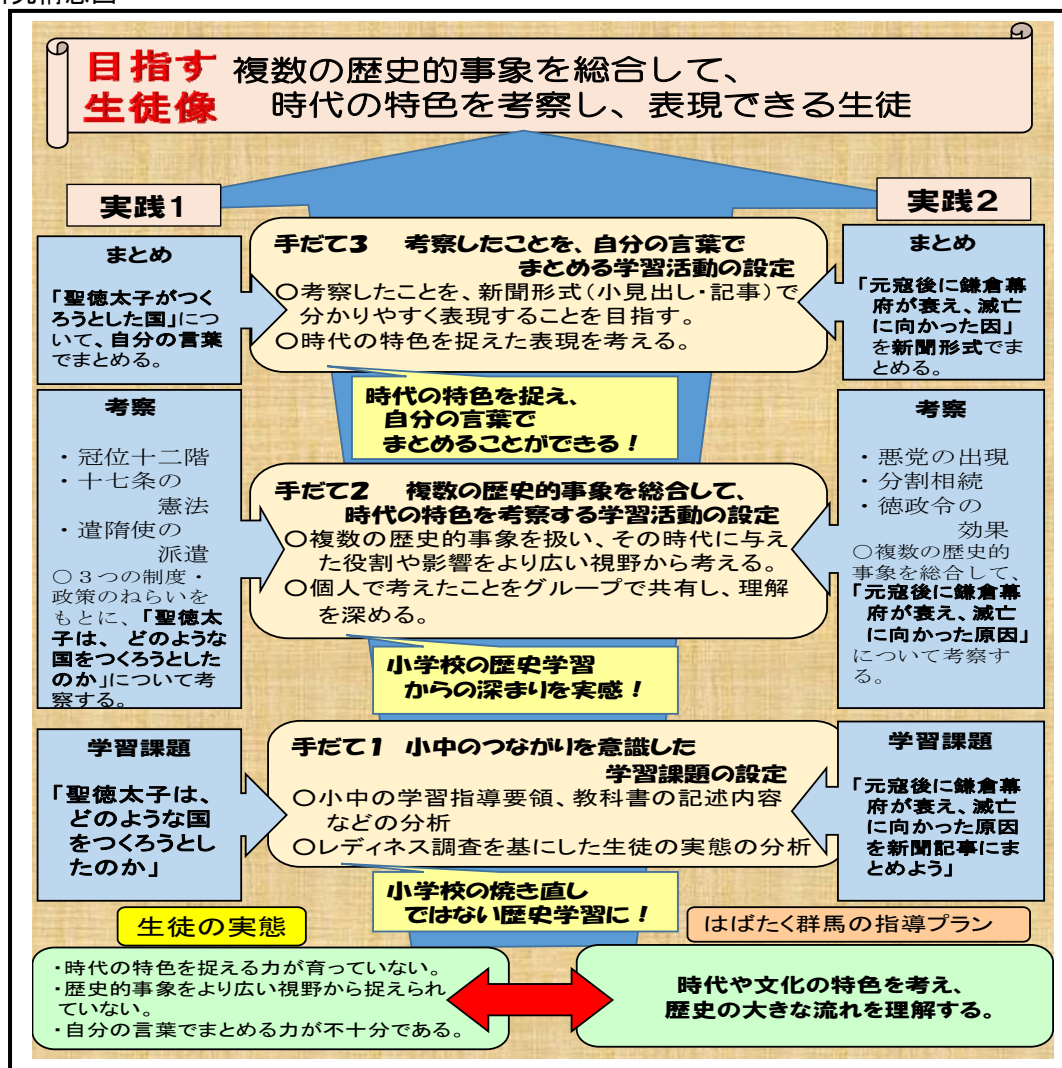
特別研修員 落合 清貴

I 研究テーマ設定の理由

2015年6月、国会で改正学校教育法が成立し、小中一貫教育を実施する「義務教育学校」の設置が可能となった。現在小中一貫教育を行っている学校は全国1743市区町村で、1130件あり（2014年5月文科省調査）、その動きは広がりつつある。本校では昨年度より藤岡市教育委員会からの要請と群馬県教育委員会、西部教育事務所からの指定を受け、連携型小中一貫校教育の研究、実践を進めてきている。その中で見えてきた小中一貫教育のよさの一つに、9年間を見据えた授業づくりができるということがある。実際に理科や英語の先行実践を通し、小中のつながりを意識した授業を行った結果、生徒の学ぶ意欲に高まりが見られたとの報告があった。そこで、今年度は社会科の歴史分野における小中のつながりを意識した授業づくりの研究を行い、より質の高い小学校の焼き直しではない中学校での歴史学習の在り方を明らかにしていきたいと考え、上記研究テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

実践1では、小中の学びのつながりを意識した授業にするために三つの手立てを用いた。

研究の手立て

- ①「聖徳太子は、どのような国をつくろうとしたのか」という学習課題を設定する。
(中学校での歴史学習のねらいとレディネス調査の結果を基に学習課題を設定)
- ②三つの制度・政策のねらいを基に「聖徳太子が、どのような国をつくろうとしたのか」を考察する。
- ③②の考察を基に意見交流し、「聖徳太子がつくろうとした国」について自分の言葉でまとめる。

まず、レディネス調査の結果を基に「聖徳太子が、どのような国をつくろうとしたのか」という学習課題を設定し、そのねらいや意図を考えていけるようにした。

最初に、これまでの学びを基に学習課題に対する個人の予想を考えた。多くの生徒が「天皇中心の国」(小学校で既習済み)と答えた。次に、聖徳太子が設定した「冠位十二階」、「十七条の憲法」、「遣隋使の派遣」の三つの制度・政策について、太子にはどのようなねらいがあったのかを考えた。このねらいを考えることにより、聖徳太子がつくろうとした国の姿について多面的・多角的に捉えられるようにした。

そして、「聖徳太子がつくろうとした国」について、三つの制度・政策のねらいを総合して考えた。「天皇中心で、隋と平等な国際的に価値の高い国」や「みんなが平等で、役人が自分勝手な行動をしない平和な国」、「有能な役人が活躍でき、国際交流も盛んな国」など、予想時よりも様々な視点から考察する生徒が多く見られた。まとめの活動として、個人で考えた「聖徳太子がつくろうとした国」について小グループで意見交流を行い、グループごとにまとめた意見を全体で発表した。多くの生徒が小学校段階よりも「聖徳太子がつくろうとした国」について多面的・多角的に捉えられるようになった。しかし、時代の特色を考察し、表現するという部分で、学習課題の設定やまとめ方に課題が残った。

そこで、実践2では学習のまとめ方や、そのための課題設定を中心に新たな手立てを追加した。

研究の手立て

- ①小学校の既習事項の分析やレディネス調査の結果を基に、生徒が時代の転換の様子や特色を捉えることができるように課題追究する場面をできるだけ絞りこむ。
- ②小グループで考察した意見の集約は分類カードを用意し、全体でまとめる時に分類しやすいようにする。
- ③学習のまとめは、新聞形式(小見出し・記事)を取り入れ、時代の特色を捉え、表現する活動につなげられるようにする。

以上のような新たな手立てを追加したことにより、小中のつながりを生かしながら中学校における、より深まりのある歴史学習に発展させることができた。また、新聞形式(小見出し・記事)でまとめることにより、時代の特色を考察し、自分の言葉で表現する力を養うことにつながった。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 学習指導要領や小中の教科書の分析に加え、レディネス調査の結果を生かすことで、中学校の歴史学習で生徒に身に付けさせたい力や、小学校の既習事項を生かせる内容が明確になった。その結果、生徒の学ぶ意欲の向上や思考の広がりにつながった。
- 新聞形式(小見出し・記事)でまとめる学習活動を取り入れたことで、時代の特色を捉え、自分の言葉でまとめる力の育成を図ることができた。具体的には小見出しには特色となるものを〔端的な文章〕で表現し、記事にはその説明を〔やや長い文章〕で表現することで、思考力・判断力・表現力を高める活動となった。

2 課題

- 表現力には個人差があり、個に応じた指導の工夫が必要となる。また、中学校3年間を見据えて表現力を段階的に高めていく手立てを研究していくことが重要である。
- 小中のつながりを意識し、中学校ではどの場面に重点を置き、課題追究させていくとよいかという学習モデルを増やしていくことが大切である。

<授業実践>

実践 1

1 単元名 「古代国家の歩みと東アジア世界」 (第1学年・1学期)

2 本単元及び本時について

本単元は律令国家の確立に至るまでの過程、摂関政治などを通して、大陸の文物や制度を積極的に取り入れながら国家の仕組みが整えられ、その後、天皇や貴族の政治が展開したことを理解することが目標である。本時は全8時間計画の2時間目にあたり、聖徳太子の政治改革について扱う。小学校での学びを生かしながら「冠位十二階」、「十七条の憲法」、「遣隋使の派遣」の三つの制度・政策のねらいを考えることにより、「聖徳太子が、どのような国をつくろうとしたのか」について多面的・多角的に捉え、自分の言葉でまとめることがねらいとなる。レディネス調査を基に生徒の実態を把握した上で、学習活動を設定し授業実践を行った。その概要は以下のとおりである。

3 授業の実際

(1) レディネス調査を基にした小中のつながりを意識した学習活動の設定

小中のつながりを生かし、中学校におけるより深まりのある歴史学習にするために、学習指導要領や小中の教科書の分析に加え、レディネス調査を実施した。本時に関わるレディネス調査の結果では、「聖徳太子は、どのような国をつくろうとしたのか」という質問に対して、多くの生徒が「天皇中心の国」と答えた(図1)。複数の事象を総合した解答はなく、小学校段階では「聖徳太子の国づくり」について単一的な面から捉えていることがわかる。

そこで、本時では「聖徳太子は、どのような国をつくろうとしたのか」という学習課題に対し、多面的・多角的な視点を持てるように課題追究させることで、小学校の学びを生かしつつ、より深まりのある中学校での歴史学習を展開していきたいと考えた。

レディネス調査「聖徳太子は、どのような国をつくろうとしたのか」(生徒数 35名)		
・天皇中心の国 (25名)	・仏教を信仰する国 (3名)	・平和な国 (2名)
・無回答 (5名)		

図1 本時に関わるレディネス調査の結果

(2) 「聖徳太子がつくろうとした国」について、多面的・多角的に考察するための学習活動

① 資料を基に、三つの制度・政策のねらいを個人で考える学習

聖徳太子が行った政治改革の柱である「冠位十二階」、「十七条の憲法」、「遣隋使の派遣」について、そのねらいが何だったのかを考えさせた。多くの生徒が資料を活用しながら、三つの制度・政策のねらいについて自分の言葉でまとめることができた(図2、3)。

制度や行ったこと	ねらい
冠位十二階	新しい国づくりには、天皇に忠実で有能な役人が必要だと考えたから→蘇我氏などの有力豪族のえいさようをうけない役人が活躍した。
十七条の憲法	天皇中心の国にするため、役人を正すため、国の中心と作る。
遣隋使の派遣	日本の国際的な地位を高めようとする(大きい国として認められるように) 対等な国交を築くため→対等の特使・留学生を送るため。

図2 生徒Aが考えた政策のねらい

制度や行ったこと	ねらい
冠位十二階	低い地位の人でも上の地位に就けるようにして、もともと高い地位の人を、ヤバイと思わせ、きつくとはたかせる。(努力させる) 天皇に忠実な役人、道を開く。
十七条の憲法	役人や有力豪族に憲法を定めることで、役人・有力豪族が憲法を束縛し、そして庶民の人もしかり守らなければならない。天皇中心の国、三つの自分の勝手行動を止める。
遣隋使の派遣	対等につきあうことで、日本の国際的な地位を高めようとした。仏教を取り入れる。

図3 生徒Bが考えた政策のねらい

②「聖徳太子は、どのような国をつくろうとしたのか」について、自分の言葉でまとめる学習

三つの制度・政策のねらいを考えたことを基に、改めて「聖徳太子は、どのような国をつくろうとしたのか」を考えた（個人学習）。

ワークシートに考えを書ける欄を三つ設け、生徒が自由にまとめられるようにした。記述には「天皇中心の国」、「役人が自分勝手な行動をしない国」、「だれもが才能や功績を認められた国」、「他の国から認めてもらえる国」、「中国からすごいと思われる国」、「高い地位の国」など複数の歴史的事象を総合して、多面的・多角的に考察したものが多く見られた（図4、5）。

天皇を中心に、平和で、ほかの国からも認められる
技術や、政治が進んだ

図4 生徒Cが考えた国の記述

天皇中心の
仏教や儒学を取り入れた
みんなが平等で、役人が自分勝手な行動をしない。天皇中心の

図5 生徒Dが考えた国の記述

③小グループで意見を交流して、「聖徳太子がつくろうとした国」についてまとめる学習

個人で考えた「聖徳太子がつくろうとした国」について意見交流（図6）を行い、共通点を見つけたり、新たな視点を取り入れたりしながら比較・関連・総合してグループとしての意見をまとめた（図7）。記述には「天皇中心で、文化が進み、仏教が盛んな国」など多面的・多角的な見方をしているものが多く見られた。



図6 小グループで意見交流

2班	中国の良いところをまねして、文化や政治の栄えた天皇中心でまとまりのある国
3班	天皇中心で、仏教を敬い能力の高い人を高い地位とする国
4班	天皇中心で、文化が進み、仏教が盛んな高い地位の国
5班	天皇中心で、隋と対等な関係の国

図7 各グループの記述例

(3)学習課題について考察したことを自分の言葉でまとめる学習

最後に「授業を通して思ったこと、気付いたこと、分かったこと」を自分の言葉でまとめた。多くの生徒が聖徳太子の国づくりへの思いや、小学校の歴史学習から考えが深まった様子を記述することができた（図8）。

<p>聖徳太子は天皇中心で、平和で、他の国からも認めてもらえるような国づくりを目指したということが分かりました。聖徳太子のおかげで今の天皇がいるのかもしれないし、今の日本があるのかもしれないので、聖徳太子の国づくりの方針は正しかったのだろうなと思いました。</p>
--

図8 生徒の記述の例

4 考察

- 学習指導要領や小中の教科書の分析に加え、レディネス調査の分析を取り入れたことで、本時に追究させたい学習課題を明確にすることができた。また、個に応じた指導をするための配慮事項を把握することができた。
- 三つの制度・政策のねらいを考えさせたことにより、多くの生徒が「聖徳太子がつくろうとした国」について多面的・多角的に考察することができ、小学校の学習からの深まりを感じるすることができた。
- 本時のまとめ及び振り返りを「授業を通して思ったこと、気付いたこと、分かったこと」について書くこととしたが、内容には個人差があり、表現力を高める手段としては不十分であった。

実践2

1 単元名 武士の台頭と鎌倉幕府

2 本単元及び本時について

本単元は鎌倉幕府の成立や東アジアの国際関係に伴う社会の変動などを通して、武家政治の特色を考え、その支配が次第に全国に広まるとともに東アジアとの密接な関わりが見られたことを理解することが目標である。本時は全8時間計画の7時間目にあたり、元寇後約60年の間に鎌倉幕府が衰え、滅亡に向かった原因を調べ、新聞形式にまとめることをめあてとした。この学習活動を通し、時代の特色を捉え、自分の言葉でまとめる力を高めていく。また、滅亡に向かう原因を調べる視点を小中の学びのつながりやレディネス調査の結果を基に絞り込むことで、より精選された中学校での歴史学習を展開していく。授業の概要は以下の通りである。

3 授業の実際

(1) レディネス調査を基にした小中のつながりを意識した学習活動の設定

本時に関わるレディネス調査では「元寇後、鎌倉幕府はどうなっていくか」と質問したところ、「力が衰えていった」と答えた生徒が27名、「ますます栄えていった」と答えた生徒が8名いた。「力が衰えていった」と答えた生徒も、その理由が「ご恩と奉公の関係が崩れたから」と答えた生徒は17名であった。また、御家人の経済的困窮（分割相続・永仁の徳政令）、幕府に従わない勢力（悪党）の出現などは小学校段階では学習しておらず、中学校の歴史学習で生徒に捉えさせたい内容となることになった。

そこで本時の学習活動を「元寇後に鎌倉幕府が衰え、滅亡に向かった要因を調べ、新聞記事にまとめよう」とし、時代の転換点となる元寇から鎌倉幕府滅亡までの約60年間の社会の変動の様子を多面的・多角的に追究する学習活動を設定した。その際、小学校の既習事項である「ご恩と奉公の関係の崩壊」、また鎌倉幕府を直接滅亡に向かわせた「後醍醐天皇を中心とした倒幕運動」は最初に学級全体でおさえ、追及する視点から外し調べる内容を精選した。そして、最後に新聞記事にまとめる学習活動を取り入れることで、時代の特色を捉え、自分の言葉で表現できる力の育成を図った。

(2) 資料を基に鎌倉幕府が滅亡に向かった原因を調べる学習活動

① 複数の歴史的事象を総合して、鎌倉幕府が滅亡に向かった原因を個人で考える学習

教科書や資料集を基に、鎌倉幕府が滅亡に向かった原因を調べた（個人学習）。調べる視点を元寇の影響、倒幕運動以外としたことで、全ての生徒が「悪党」や「分割相続にともなう御家人の困窮」、「永仁の徳政令」、「北条氏一族の権力独占」に触れることができた（図9、10）。これにより、小学校段階の歴史学習とは違った面から、鎌倉幕府が滅亡に向かう原因を考えることができた。

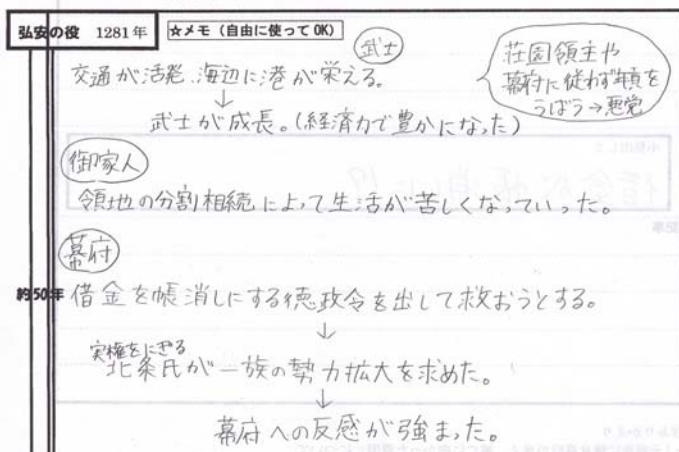


図9 生徒Dのメモ

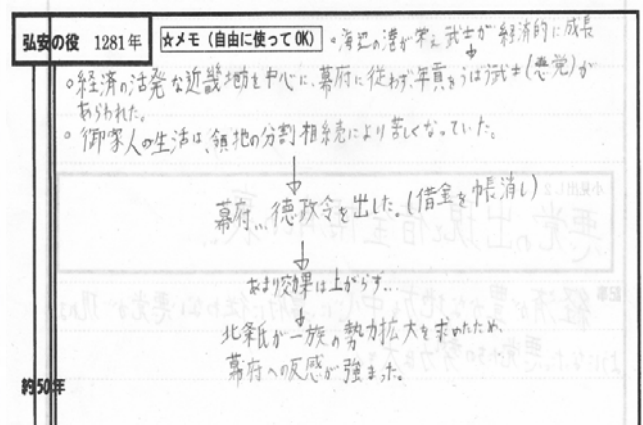


図10 生徒Eのメモ

②意見交流の場で分類カードを活用し、思考を広げる学習活動

個人で調べたことを小グループになり意見交流し、分類カードにまとめた(図11)。個人では調べきれなかった新たな視点を獲得できた生徒も多くいた。グループ活動の後はカードを黒板に貼り、鎌倉幕府が滅亡に向かった原因を分類した(図12)。カードにしておくことで、黒板での分類がスムーズに行えた。分類の結果、「悪党の出現」、「分割相続」、「永仁の徳政令」、「北条氏一族の権力独占」の四つの視点にまとまった。「悪党とはどんな存在か」、「分割相続で、なぜ御家人が苦しくなるのか」、「永仁の徳政令は、なぜ効果がなかったのか」などを生徒に発問し、理解を深めていった。



図11 意見交流の様子



図12 分類されたカード

(3) 鎌倉幕府が滅亡に向かう様子を新聞記事の小見出しにまとめる学習活動

最後に「鎌倉幕府が滅亡に向かう様子」を新聞記事にまとめた。本時では小見出しを優先して書き、記事は時間に余裕があれば書くこととした。小見出しの記述からは鎌倉幕府が滅亡に向かう原因について、複数の歴史的事象を総合し、多面的・多角的に捉えている内容が多く見られた(図13)。

「鎌倉幕府が滅亡に向かう様子」を伝える新聞記事を書こう 小見出しの例		
生徒F	「土地がもらえない御家人たち」	「悪党の出現と借金帳消しの裏・・・」
生徒G	「御恩の領地を早くください」	「御家人は信用できない」
生徒H	「幕府約束果たせず」	「あまり効果がない徳政令」
生徒I	「ご恩が出せない ご恩と奉公」	「借金帳消し!? 徳政令」
生徒J	「苦しい勝利 ご恩はどこ」	「言うこと聞かない暴れる武士たち・・・」

図13 生徒の書いた小見出しの例

4 考察

- 小中の学びのつながりやレディネス調査の結果を分析したことで、本時において追究させたい学習課題を精選することができた。また、課題追究の内容をできるだけ絞り込むことで、生徒の主体的な学習活動の時間を増やすことができた。
- 小学校の学びを授業の中で生かすことで、小学校からのつながりや、中学校ではさらにどのようなことを学ぶ必要があるのかが明確になり、生徒の学ぶ意欲の向上につながった。
- 新聞形式(小見出し・記事)でまとめる学習活動を取り入れたことで、時代の特色を捉え、自分の言葉でまとめる力の育成を図ることができた。具体的には小見出しには特色となるものを〔端的な文章〕で表現し、記事にはその説明を〔やや長い文章〕で表現することで、思考力・判断力・表現力を高める活動となった。
- 小見出しには「ご恩の領地を早くください」、「悪党の出現と借金帳消しの裏・・・」、「あまり効果がない徳政令」など鎌倉幕府が衰え、滅亡に向かう原因を的確に捉えているものが見られた。
- 小中のつながりを意識し、段階的に表現力を高めていく手立てを考え、系統性を持った指導をしていく必要がある。